

河井道子における国際性と信仰（その3）

一 色 義 子

1. はじめに

河井道子（1877－1953）は、1945年8月15日、戦争が終わった時「私どもの命を捧げる時が来た」と書簡¹⁾に記した。68才であった。その日から1953年75才で召天するまでの8年間、正味7年余りは、全くその言葉通り「命がけで」寸刻の余裕もなく、東奔西走した。

この年月は、1951年9月8日対日平和条約・日米安全保障条約が調印され、ようやく、独立国への歩をはじめたばかりの時期であった。したがって、河井にとって人生最後の時期はほとんど、日本が敗戦、ポツダム宣言を受諾して、無条件降伏をし、「占領軍」に支配された占領下の時期であったといえよう。その意味では河井は日本が平和国家としての再生に尽くしたが、今日のような国際社会で場を得、豊かに繁栄するとは、目では見なかった。貧しい国にありながら、神が支配される地球世界に明るい幻をみ、そのために力の限りを尽くしたといえよう。

そこには、戦中、時流に抗して平和を望み信仰に決然とたち諸難にかかわらず、キリストにある「国際性」にたった河井には、一貫する姿勢があった。

河井の国際性を論じるにはその領域は、多岐にわたった。日本の賠償問題にいち早く行動を起こした。²⁾1946年、戦後最も早期に、最初のアメリカからの教育調査使節団が来日し、それに対する日本側の委員に選任され、米国の学者に対して、対等な意見を述べた。

また、教育刷新委員として、女子の高等教育部門の教育の刷新において特

筆すべきものがある。現在、女子の大学進学率が男子を上回る一因は女子の短期大学にもあろうが、日本の戦後において、短期大学設置・存続は河井の働きがなければありえなかったといわれる。日本を代表して、短期大学視察団の一員に委嘱され1951年、未だ、自由な外国への渡航が禁じられていた「戦後期」に、アメリカを回った。そこでのアメリカの人々との出会いはキリストによるゆるしと和解があった。かつて、平和のため日中戦争の直前に中国キリスト者を、また日米開戦直前に米国キリスト者を、日本のキリスト教界を代表して平和の祈りをもってたずねた、五人の一人、唯一の女性だった河井が果たした役割に重なるものがあった。河井は多くのアメリカ人から、関心と期待を受け、和解の契機となった。

本論においては、戦前、戦中に培われ、いわば、統制国家と社会の態勢のもとにあって意に反して、地下に押し込められ勝ちであったキリスト教における河井の国際性が、やはり、敗戦国という他国の支配下にありながら、その制約を超えて、内外公に河井の使命感に押し出されて発揮された時期としても、とらえることができる。

いずれにしても、どこの働きの断面を切っても、キリストの臨在感にあふれていた河井の国際性を具体的事実を立て論じる。その上で河井の国際性の鍵を論じる。

河井の国際性を論じるに当たって、戦前、戦中において、軍国の自国中心主義のもとにありながら、それを超えるものを志向していた時期から、一変して、そうした日本の国粹主義が批判されるべき風潮に至った戦後期に焦点を当てる。もはや、平和期に入って、平和志向であった、河井の国際性は時流に乗るものなのか、あるいは、そこに河井ならではの特色が如何に発揮されるのか、あるいは戦前、戦中、戦後を通じて、河井の国際性として、一貫するものがあるのか、さらにそれが、次の世紀に対して、20世紀をきた者からの発言として問いかけるものがあるのか、探る契機となることを願う。

2. 独立と依存

国家の独立の存亡をかけた、いわば、独立をうしなった敗戦国としての、

いつまで続くか不明の他国、戦勝国、特にアメリカに依存している不安定な時期にあって、河井の国際性の最後の時期を劃さなければならない。

これまでの時期を軍国時流への抵抗期という視点で見えてきたとすれば、今期は国家が独立をうしない、依存する時流にいかに向き合ったか、をまず、警見する必要がある。従って、第一のテーマを独立と依存におく。

1945年8月15日を境に河井の生涯を閉じた1953年2月までの時期はその大部分がいまだ講和条約締結は遅れ、米軍が全面的に駐留を続けている時期、敗戦による戦後であることを認識しなければならない。それは、経済大国といわれるようになった、現在から考えることはほとんど不可能と思われる位、国家の存立が他者に依存していた。

敗戦国として、この時期もっとも象徴的なことは、米軍進駐と連合軍の長期駐留であった。国家はすべての機関を米軍の指示のままに依存するほかはない現実から戦後が始まっている。

1945年8月31日、米軍の最高司令官であったマッカーサー総司令官が厚木に到着、横浜に入った。9月3日、ミゾーリ号艦上で降伏調印式。9月8日、連合軍が「帝都へ進駐」、9日、米国大使館がマッカーサーの住居となる。一方、日本の憲兵が解散し、大本営が廃止され、代わって米軍の憲兵が銀座の交差点に立ち、「文教再建」³⁾等の意見も新聞にみられたが、しかし、当時、一般のひとびとが、感じたのは、神風が吹くはずであった不落の日本が破れたという困惑であった。そのことは後に「敗戦の結果日本が明治の初以来未だかつてない八方塞りの状態に置かれている」⁴⁾と説明された事でもわかるように、それが、人々の実態であった。思想の統制になれている者が自由な論評も、どうあるべきかも、語る事はとぼしかった新聞には限られた表現しかとどめられず、自由の実感が十分表現されていない。(9月30日に新聞・言論の制限全廃止となる)⁵⁾

その困惑の民心の中で、河井は明確になすべきことを知っていた。それは彼女のキリスト教信仰によるものである。河井の国際性の一貫である。

旧約聖書の中で、国破れた民のなお生きるべき道が再三預言者によって示されている事を、如実に感じていた。その中にあって、神の導きと摂理が

あることを、熟知していた。ただ、神にたちかえる時にその導きがあることを、彼女は確信していた。「凡そ戦災にて破壊されし土地は先づ後始末、後片付けをせずば新建築は不可能と同様に国民は将来の建設の前に反省懺悔がなくてはならない。」⁶⁾

「敗戦の直接責任者は様々に公定もあらうが、其れとは別に国民各自が、老若男女、貴賤貧富の別なく正直に懺悔し謝罪すべき秋が来た。誰が自分だけは正義のみで行動をしたと言ひ得る者があらう。」⁷⁾河井独自の論理の展開は、自らの反省と懺悔、「多少の差こそあれ他を押しつけて自分だけの便宜と福祉を求め、高慢不遜の罪を犯し」「道義」⁸⁾、内心の罪の深みにまで掘り下げる。この一点において、すべての人とは共に悔い改めの思いを喚起しないではおられない。自らがまず、その思いで、たつ。しかし、ここで、もう一つ、彼女の独特の転換がある。「ただ反省した悔改したのみで何も働かさぬと其決意も消失する……。忍耐に忍耐を積みかさねて努力に努力を増し加へて前に置かれた茨の原野を拓いて行かんと祈るのみである。」⁹⁾とつながる。かつて、彼女がもっとも絶望的であった母の死の直後においては、他者の為の事業に傾注邁進することで、不可抗力の悲しみから脱却したように、不可抗力の敗戦と混乱という国をあげての患難に如何に処すべきか誰もが不明瞭な時、河井は、目前の他者の苦難を負うことに果敢にたちむかい、事ごと実行した。

第1に9月1日から学園の再開、2日間の大掃除で3日めにはもう授業を始めた。一方、戦時中抑留されていた宣教師の中で解除になっても引受人がいない女性の宣教師3人を河井は引き取りに行き、自分の家に住ませた。アメリカ人外人に対して、敵愾心と、敗戦という屈辱感からひとびとが彼らになにをするかわからないような誰もが関わりたくないという時期であった。加えて、乏しい食料を分けあった。栄養失調で半病人のような老婦人たちであった。

失業者477万人、引き揚げ者は日々増加。米、塩が放出された。

なお学園に対して、「以前より宗教と国際に力をいれていて戦争中に続けていたが今度一般教育に此等の方面が力説されて来たことも又我々には愉快

でならない。然し何も誇る処があるのではない。斯く導き給ひし神に感謝しつつ恵みに伴ひ責任を普通以上に与へられし思ひ謙遜に忠実に進み度いものである。」¹⁰⁾

本質的に河井は国家に依存していない。「人々」について関心の中心があった。それは、人間として、特に、社会から冷遇される人々に対して、河井は本能的といえるくらい、深い同情を感じた。それを、放置出来なかった。いかなる立場であろうと、自分で出かけて行ってでも善処するため最善と思われる行動を実行した。

一卒業生の夫のため、進駐軍を通じてまだ日本になかった薬を米国から空輸することに尽力しその生命をたすけた。ある女性が引き揚げて道路で労働をしなければならなかった彼女に最も暖かな毛皮の外套を惜しまなかった。といった具体的な例が数しれずある。

米国のミッション本部は戦災で焼けたミッションスクールにさまざまな経済的援助を寄せた。どんどん復興していった。それに対して、河井の学園は戦災に会わなかった幸いもあったが、ミッションと関係がないゆえ、経済的にもまったく独立であった。ただ、河井の友人から、日本でも、アメリカでも個人として、さまざまな善意と好意の援助がおくられた。ララ物資といわれる救済物資として、古着が送られ、それを維持会が整理して皆に分け、また友人からの古着を改造、売る事によって、学園をささえる一助とした。それはまったくの日本人、アメリカ人ともに河井への友情であった。

ミッションスクールではなかったが、河井の学園への理解で、若いJ3とよばれる短期宣教師が2人、恵泉女学園に来た。それは特別の配慮であった。

河井の恵泉女学園にはミッションからの援助はなかったが、友情による援助は思いがけないところからあらわれた。河井の話に感銘をうけた、アメリカ軍の夫人たちが、ジープを連ねて、教えに来ることになり、母国語のひとびとから英語を数えられることが出来た。経済支援ではなく、人格的、人間的ボランティアの支援であった。

3. 弱者と強者

その事態があるいは政治的に如何であるかという視点よりは、河井の視点はあるくまでも、一人の人間として、「弱い」者を放置出来なかった。世間一般の大勢は権力あるものを強者とみた。特に統制国家の直後、自由に解放されたとはいっても、権力志向のメンタリテイは一朝にして変らなかった。

ある時をおくと、今度は進駐軍一辺倒、米国一辺倒のような一般の動きもあった。「強い」者に、依ろうとする時代の傾向があった。

米兵のことを英字の雑誌の記事を読んで人道から誉めている河井の記事があるが、また一方、実際の町中で、ジープを酒屋に横付けして、無理難題を言っているのを見ると彼らを注意している。河井は誰もが呆然としているところへ、自分からそばに寄って英語でいさめたことは何度もあった。日本の若い女性を連れて騒いでいた米兵に近寄って「あなたのお母さんが見たら悲しむのでないか」といさめた後、兵隊が「自分が悪かった」と謝った。河井はそれを「わたしのようなおばあさんのいうことを聞いた」と誉めている。誰もが、注意できないような中でも、河井は日常の、あたかも、親類の子に注意するような調子であった。外人だから、米兵だから、という例外は河井の中には無かった。

河井にとって、「強い」人間はなかった。

正義を遠慮する相手はなかった。彼女はその頃、「道徳的勇氣」ということをしきりに学生に語り、試験問題にまで、それを例をひいて、説明させた。

4. 国際性と日常性

国際という地球世界を領域とした対象に対して、河井の思考回路に一つの独特のパラダイム (paradigm) がある。

河井の国際性の関わりにおいて、国家の位置が、その構成員たる人間の日常性の中に集約されていく。そして、その日常性のもとに、神と向き合うものが入ってくる。河井の国際性はその対象である、他者の国際性において、その相手の国家の位置がまた同様にその構成員たる個々の人間の日常性の中

に集約される。国際性を媒介として、自国の人々にたいしても、他国の人々に対しても、同様のこのパラダイムが引き起こされる。

国際性という通常考えれば最も日常性から離れた位置にあると考えられる事象が、河井においては、最も身近な、日常性の中に位置を持つところまで収斂される。ここにおいて、河井の場合、国際性はそのままだ日常性であり、日常性はすぐ国際性となる。

それは度々、神との関連に基礎をおく。ということは、個々人に相対し、働かれる神にいたる。

河井の国際性はその基礎において、個々人の交わり、個々人の神との交わりの中に、互いの関わりを見いだす。その意味では社会主義運動のような、この社会で生きていく生活していくための基盤としての、経済活動上の共闘としての、連帯に結びつかない。戦後、やがて、盛んになった、社会主義、プロレタリアート運動に同情こそあったが、彼女自身が引き入れられることはなかった。それはある青年たちにとって、彼女の限界と映じたこともある。しかし、経済性や政治性に焦点を持つよりは、神との関わりをすべてに優先した河井にとって、それはむしろ当然の帰着であった。

河井の政治理解も同様であったといっても過言ではないと思われる。大臣であろうと、無かろうと河井にとっては、問題ではなかった。その個人の日常性において、人格がどうであるかが、根本であった。河井のパラダイムはそこに帰着し、政治においても、一人一人が神との対決の中で決断がされることを尊重しようとした。

政治形態にたいしての、意味付けも今からみれば、一方で、河井は明治に生まれ、成長した限界があったといわなければならないとも言える。いわゆる天皇制に対しての自覚的反論がないし、容認している感がする。けれども、本質的に天皇制にとらえられていたかと言えば、そうではない。「内なる天皇制」とよく言われる内実的天皇制に河井はとらわれていなかった。否、むしろはっきりと否定していた。これは、戦前、戦中、戦後を通じて、はっきり言える事である。戦前、戦中、特高につかまった時も、天皇を神とは言っていない。いわゆる「御真影」なるものを一切退け通した。戦後、河井

に皇后に聖書講義をするように依頼を受けた時、河井はその一回の講義の間に皇后を「奥様」と普通の女性と感じて話していたことにあとで気づいた。皇后の服装もいわゆる宮中服で見るからにちがう当時そのようなことは、ありえない雰囲気なのこっている時代にである。河井は皇后に一人の人間一女性を見ていた。もし、河井が今の時代に生きていたら、繁栄の中にある政治形態に別の批判をもったかもしれないと類推される。

換言すれば、政治に対しても、河井は日常性にまで手近なものに還元することで、一貫した真実の神と人の関わりとの関係に集約したといえよう。

その頃の河井の言動の中に「小なりといえども、人道をもって国を立てる」と言って、学生、生徒を励ました。彼女たちが、国を改革することが出来るということを信じている、その思いは学生、生徒を鼓舞した。それはこの、大なることも、日常性の中に集約できるパラダイムにおいて、可能なことであった。

賠償問題に関しては河井はそれは私たちの責任であると感じ、学生・生徒たちに語った。国家の賠償責任が河井においては日常性の中に感じとられていたのである。

5. 国際性の優先

(1) 米国教育使節団の日本側委員会の一員として。

1945年中にすでに米国から専門家による教育使節団派遣の話が起こり¹¹⁾、日本側教育家委員会は「発足後、1946年2月18日に第1回委員会が開かれ（中略）続いて2月23日に第2回委員会で（中略）教育使節団の4委員会構成に対応した4つの分科会が設けられ、委員の配分が行われた」。¹²⁾最終的に1946年3月5日に第1次米国対日教育使節団27名内女性4名が来日した。日本側委員は29名で内女性は河井道子と星野あいであった。4部に分かれ、河井は第1部会に属し、第3部会を兼務した。

最近、日本側教育委員会の「自主性」について、論議があるが、その委員の構成を見るとキリスト者の占める率が大きく、自ずから彼らが他者によって容易に動かされる人々でないことはあきらかで見られる。筆者は河井に関

して、その「自主性」を傍証することが出来ると思われる。

「米国教育使節団第3委員会報告書—初等学校及び中等学校における教育行政」¹³⁾の中に示される「基本的教育原理」は河井の1929年恵泉女学園建学の趣旨と多く共通するものがある。3月14日には、「全米教育協会の女性委員であるドノヴァン陸軍大尉が日本における女子教育についての報告をした。津田塾専校長の星野あい女史と恵泉女子農専校長の河井ミチ女史が手伝った。自由でよくまとまった報告であった。大学教育をうけることのできる日本女性はわずか0.4%である。」¹⁴⁾ (ウィラード・E・ギブンスの手記の翻訳) (これはCIE教育スタッフ報告として総会の席上でなされた¹⁵⁾) に関しては「教育使節団の作業は、「報告書」を作成するに当たっての日本教育に関する歴史と現状の理解、およびそこでの改革されるべき問題点の発見と確認、そして関係諸資料の収集という点に向けられていた。そのような作業の過程で特に注目されるのは、CIE教育課スタッフと日本側教育家委員会の委員を含めた日本の教育関係者の積極的な協力活動である。そうした両者の協力のもとで来日後における第1段階の基礎的な作業が勧められたといえよう。」¹⁶⁾

河井の英語の著書の Sliding Doors には河井が記した報告書の概要として「女子のハイスクール (1946年3月)」という題で掲載されている。そのなかごく一部に過去の日本の状況に触れ、「家族制度は戦時にせよ平和時にせよ国際的な問題に対処するには偏狭すぎた。」¹⁹⁾ 「(女子教育において) 社会を広く見ることを無視していた、他国の女子や女性のことやその家庭生活がどのようかはわずかに映画でみるぐらいで本の知識しかなかった。このようにゆがめられた像では外国について誤解を抱き、けっして、国際平和をもたらすことは出来ない。」¹⁷⁾と記されている。

(2) 国際基督教大学設置への協力

大学建設委員会は1946年12月3日第2回委員会を開催し40名をこえる委員が出席した。そこで実行委員会が指名された。1946年12月23日実行委員会は明治学院で初会合を開いて、学長予定者を指名し、更に運営委員会において、五分野にしぼって、それぞれの分野について専門家から成る部会をつくることを決め、部会の招集者を選んだ。文学、哲学、神学に石原謙、理工学

に山本忠興，社会科学に酒枝義旗，教育学に河井道，医学と公衆衛生学に小竹博士，財政・設備部門に里見純吉，組織・行政部門に神崎一が選ばれた。¹⁸⁾1947年1月のアメリカ側の設立委員会の動きをうけて，日本側委員会が動き始めた。「彼らは行動するとなると，冷静に，しかも，驚くべき迅速さで躊躇無く行動した。これが草創期の人たちの特徴であった，日本側委員会の中枢は東京にあり，精力的に活動を推し進めたのは，主に六人足らずの男女のメンバーであった。河井道，アリス・ケアリーをはじめとする委員たち。」¹⁹⁾これに山本忠興，齊藤惣一たちが活動的だったという。小人数のグループだったため決定された構想は即刻，実行に移されたという。やがてこれら専門家の委員会は専門委員会となって構成委員を編成して，1947年2月までに基本的な趣意書，学部や教員についての計画を練る作業を進めた。²⁰⁾これを見ても河井がいかに熱意をもって，この大学の創設にかかわったかが分かる。

また，河井は大学幹部を指名する特別委員会の委員長になった。²¹⁾

交通状況の不便な当時，河井が委員会に出席してなみなみならぬ熱意をもってたずさわったことは，「また，新しいキリスト教の大学のため」という忙しい日常，さらに忙しかったことを思い出させる。1947年12月に国際基督教大学研究所がはじまり，翌1月に開所式。土地購入等が進展するにつれ，法人組織の必要が日本側ですすめられ，1948年5月13日，財団法人国際基督教学園の名で認可，この最初の理事会メンバー10名の中に河井道がいた。

「1948年3月の委員会の後，委員たちは自らの最初の寄付金申込書を回し，数十万円の寄付を行った。」²²⁾という意気込みは，河井も含まれた日本側委員の情熱がわかる。

1950年朝鮮半島の動乱とともに，ICUの募金は足踏み状態となり，開学さえ延期されていた。アメリカでは4月に全米で「ICU週間」の募金計画をたてていたが，最も中心になっていたデッフェンドーファ氏が1月31日急逝したことは痛手であった。

河井はちょうどその1月に日本の短期大学の代表の一人として，戦後はじめて軍用機で渡米していた。アメリカの女性グループの募金活動に触れて

「日本からのキリスト者の使節の中でも最も知名度が高く、好感を持たれている一人、河井道も人の心を引きつける訴えをして回った。」²³⁾とある。

この募金活動は河井にとってはまことに悲痛なものがあった。わずかに残されているアメリカ滞在における自由な時間に、河井は恵泉女学園のため、特に恵泉女学園短期大学に条件とされていた、図書館の設置のために、友人知人を訪ねて、援助をもとめるせっぱ詰まった計画をたてていた。そこへ、ニューヨークのICU募金委員会からの電報が届いたのであった。

そして河井は他者の為、自分の計画をなげうつことを決意した。河井にとってもう二度と再びアメリカを訪問することはないと思っていた最後のチャンスであった。しかし、ICUのため、日本のキリスト教の教育のため、この大義のため小義を割愛した。これが、河井である。彼女の人生において、どれほど、他者のために、自分を、また、自分のしている恵泉女学園に対する使命さえも犠牲にして、より公義のため、尽くしたかわからない。

6. 国際性を支える祈り

世界婦人祈禱日－河井は世界婦人祈禱日の祈禱文プログラムの執筆者に選ばれた。テーマは「平和」であった。この執筆依頼は、教育使節団の訪日とほとんど時を重ねていた。河井にとっても、もっとも多忙な、責任のある時、彼女は真夜中を徹して、この国際的な要望を熱意をもってはたした。それは1948年、世界中のキリスト者女性たちが、教会に集い、太陽のめぐるにつれて24時間地球のどこかで、祈り続けられた祈禱文であった。平和の前に、主の前に懺悔と悔い改めが必要であることを告げていた。

第2の自叙伝ともいえる「スライディング・ドアーズ」(Sliding Doors)²⁴⁾が1951年1月に出版。それには、「私のランターン」以降の事が記されているが、ことに、中国のキリスト者宛に、書いて、ついに、戦争勃発で、届かなかった手紙が掲載されている。河井の視野に中国が絶えず深く刻まれていた。その影響が恵泉女学園で学んだ者の中に深く残った。現在でこそアジアへの関心が高まっているが、河井の内には、その思いが深かった。しかし、彼女には敬愛した中国のキリスト者女性たちとの再会の折は遂に与えられなかつ

た。

河井は戦後人々がアメリカに風靡していった時、「まちがった西洋かぶれは、間違った思想だ」とたしなめた。

「唯一の道」－ Stanley JonesのThe Wayという小著がこの時期の河井の座右の書にあった。

イエス・キリスト中心それは愛なる神中心の唯一の道だと強調した。

主イエスのごとく、仕える姿勢をわたしたち一人一人が世界に対して抱くようにもとめた。

そして、「志をたてて下さり志に応じてやりはじめたのだから、きつとなし遂げてくださる、この信念がなければしごとは出来ない。神がゆだね給うたものなら、きつと出来上がると確信しなくてはならない」「神を中心にするのは大事業である」²⁵⁾と恵泉の学生にくり返し語った。

「朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命にいたる食べ物のために働きなさい、」(ヨハネ6：27)「神がお遣わしになった者を信じること、それが神の業である」(6：29)神の我らに与えられたみ業をなしとげる。信仰は食物である。我々にはこういう食物がないからすぐに空っぽになってしまう。もし神を信ずれば泉の如くわいてくる。神をまちのぞみそれにたのむものは疲れない」²⁶⁾イザヤ書40：28は河井の繰り返し引き合いにだした聖書であった。

「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない」(ヨハネ14：6)の言葉は河井において、国際性においても、日常性においても、すべてであったといえよう。

河井の最期はがんに苦しんだが、讒言になったとき、力強く祈った。「国際的ガゼをください。これは皆が心をいれて私に下さったのですから、それを私に使う時は、祈りの心をもってして下さい。」²⁷⁾というような表現をした。「いま、ガリラヤ湖畔のほとりを歩いて来たの。あそこには、大勢のかわいそうな子供がいるから－私が先に行ってみるから、あとから二人で行きましょう」²⁸⁾ともいった。彼女をとりまく輪は幾重にもしずかに賛美歌を歌い終った。世界中から彼女が愛し、彼女を愛した人々の感謝と祈りの何重もの

見えない輪を感じた。その中で、河井道は主のみもとに召された。数しれぬ電報と手紙が国内はもとより、海をわたって久しく寄せられた。

7. おわりに

河井の国際性には一貫性があった。それは戦中という国粹主義で世界と遮断の時流にもかかわりなかったし、²⁹⁾ ことに、戦後という時期にも動揺せず、一貫していた。河井の戦後を瞥見すると、客観的には、国際的意見の交流、関わり、連携を誰よりも早くから、ことに、日米の関係において、持つ立場になることになった。その時に、河井の中心は米国がどう考えるか、日本の国益がどうであるか、ということではなく、神の前に立つ者としてそこに焦点を当てた。河井はこちらの立場は敗者であろうと、相手が戦勝者の立場に対してであろうと、また、国、社会、世間の地平に映るものとは別に神の支配の地平によった。したがって、人々が、とかく、米国、米軍におもねり、独立の気風がないがしろになびくときにも、独立の精神がゆるがなかった。

また、つねに、弱者の味方になるということは、戦後の弱者と強者の入れ替わりの変動期に、人々から顧みられなくなった側への配慮に心をくいだいた。その時の弱者へのバランス感覚がするどかった。

河井の国際性の特色のもう一つは、国際性がそのまま日常性に集約され、日常性がそのまま国際性に通じるころであった。すなわち、国際性がわれわれの日常の生活から遊離したところにあるのではなく、日常生活の中に引き寄せられ、手のとどかないものでなくなるころにある。さらに、また、国際性を重んじ、自己の労役の中にそれを数えることで、相応の犠牲が生じること当然と、喜んでその犠牲を、日常の中で引き受けても、国際性を重んじる事に価値をおいた。

この場合の河井の国際性は、すなわち、他国の、他者の人権、人間性の尊重であった。

それらを支える支柱は祈りであった。祈りの力を信じ、祈りの広がりを感じた。「祈りは正しい道に引っ張って行く神の綱のようなものである。」³⁰⁾ 河

井は祈りによって、その時歩むべき道を発見出来た。「祈りが足りなくなった時、何もできなくなる。その時とりなしの祈り、皆の祈りが必要である」³¹⁾と言った。これが、河井の国際性の鍵であるといえよう。それは地球上のどこにいても、同じ力、等しく人を結ぶ力である。誰にとっても、イエス・キリストの十字架の愛のとりなしなしには、生きる事のできないのが人間であることを、知っていた。「神よ、信なき我を哀れみ給へ」と祈りつづけ、神は愛の犠牲を以て人類を改造し給う事を信じ、闇の中にも光を見出し……。勇敢に生活すべき秋が到来した」³²⁾と言っている。

神の愛の恵みに感謝の思いを捧げるとき、河井にとっては、その恵みを他者にわかちあわなければならなかった。それは、すぐに、周囲にひろがり、国をこえ、人種をこえ、世界の愛と出会う事であった。そこに神の意志があると受け入れる事であった。

注

- 1) 河井道子、一色ゆりへの書簡、拙著「愛の人河井道子先生」、創元社、1953
- 2) 「恵泉」、153号
- 3) 朝日新聞、1945年9月9日版
- 4) 安倍能成、「戦後日本教育資料集成第1巻」、三一書房、P.76
- 5) 朝日新聞、1945年9月30日
- 6))
- 7))
- 8) } 河井道子、「恵泉」128号、指示されし道、1945年9月25日発行
- 9))
- 10))
- 11) 教科教育百年史編集委員会編、「原典対訳 米国教育使節団報告書」、建社、1985、P.235 (略一原対)
- 12) 前掲(原対) P.239
- 13) 前掲(原対) P.62-73
河井道子、“Sliding Doors”, P. 124-127
- 14) 土持ゲーリー法一、「米国教育使節団の研究」、玉川大学出版部、1991、P.369
前掲(原対) P.237
- 15) 前掲(原対) P.241

- 16) 前掲(原対) P.243
- 17) 河井道子, "Sliding Doors", P. 127
- 18) C. W. アイグルハート, 「国際基督教大学創立史」, 国際基督教大学, 1990, P.44, (略-ICU)
- 19) 前掲(ICU) P.48
- 20) 前掲 P.48
- 21) 前掲 P.99
- 22) 前掲 P.62
- 23) 前掲 P.133
- 24) 河井道子, "Sliding Doors", 恵泉女学園, 1951
- 25), 26) 河井道子, 「聖書」講義ノート, 著者蔵
- 27) 拙著「愛の人河井道子先生」, 創元社, 1953
- 28) 拙著「愛の人河井道子先生」, 創元社, 1953
- 29) 拙稿, 恵泉女学園大学人文学部紀要第5号, 河井道子における国際性と信仰(その2), 1993
- 30), 31) 河井道子, 「聖書」講義ノート, 著者蔵
- 32) 「恵泉」159号, 河井道子, 恩恵を数えること, 1952年9月30日発行